

第 24 回 中国から伝来した干支と羊と未年

1 明治 5 年 12 月 3 日に太陽暦に切り替えた真相

新年あけましておめでとうございます。平成 27 年、西暦でいうと 2015 年になります。日本では、この二つの年の言い方があります。西暦というのは、明治 5 年、西暦 1872 年に、従来の暦を廃して、翌年から太陽暦を採用することが布告されました。この「太陰暦ヲ廢シ太陽暦ヲ頒行ス」という明治 5 年太政官布告第 337 号、改暦ノ布告によってそれが宣言されます。この内容では「來ル十二月三日ヲ以テ明治六年一月一日ト被定候事」と決められました。当時の欧米列強が使っていたグレゴリオ暦の 1873 年 1 月 1 日に当たる日が、明治 5 年 12 月 3 日であったことから、この日を明治 6 年 1 月 1 日とすることなどを、この布告で定めたのです。

当時、この日に太陽暦を採用した理由には「大きな陰謀がある」といわれていました。当時、明治政府は、さまざまな改革や岩倉使節団の遣欧などによって、非常にたくさんのコストがかかっていました。特に、急激な欧米化によって様々な制度を変えることや、あるいは廃藩置県や廃刀令などによって武士に給与を払うことなどが決められたために、財政はかなり逼迫していたのです。

その大きな出費の項目が「人件費」。全体における人件費の費用の大きさは現在と全く変わりません。特に大久保利通が定めた国家公務員は、日本国のエリートを集めた集団だけに、その人件費も馬鹿になりません。その人件費の中で最も多いものが冬の賞与です。そこで、ちょうど大久保利通が岩倉使節団でいない間に、冬のボーナスを無くしてしまうということが考えられたというのです。ボーナスの付与は毎年 12 月 10 日です。これは今も変わりませんが、明治政府は、その直前である 12 月 3 日にグレゴリオ暦に切り替えることによって、1 回分のボーナスの支給を取りやめたのです。

またこのほかにも、大隈重信の回顧録『大隈伯昔日譚』によれば、他の理由が書いてあります。明治 6 年は、従来の暦でいうと「閏年」です。要するに、月給制の場合は 13 か月分の給与を払わなければなりません。しかし、明治 5 年のうちに太陽暦に切り替えてしまえば、閏月の心配はしなくて済みます。また、太陰暦の時は曜日の感覚がなかったので 1 と 6 のつく日が休みでした。それを週休制にすることによって、公務員の休日を 50 日ほど削減するということができるようになったのです。そのように休日の削減と給与の支払い

の「節約」によって、明治5年の12月3日を太陽暦の明治6年1月1日に変えてしまった、というのです。

公務員にしてみれば良い迷惑です。現在ならば反対運動がすごいのではないのでしょうか。しかし、当時それだけ明治政府の財政が逼迫していたということも事実でしょうし、また、当時の公務員は、実は江戸幕府の職員が多く採用されていたということもあります。明治政府といえども、国家を動かせるほどの官吏を、それほど多く集めることはできなかったし、薩摩や長州の藩士では足りなかったという事情もあります。何しろ、明治政府の人材不足は非常に深刻で、警察官も多く採用することができず、あの有名な清水の次郎長や、明治政府に反抗した新撰組の志士も警察官として活躍していたのです。本来ならば処刑されたり冷遇されるべき人々が国家公務員に多かったために、明治政府の方針に反発することもなく、スムーズに暦の移行ができたのではないのでしょうか。

いずれにせよ明治5年の12月3日までは、日本は太陰暦を使っており、その時から太陽暦に切り替えたのです。

2 元号と国の支配の歴史

では元号の方はどのようなものなのでしょうか。

元号とは、西暦のように、その最初の年から永久に数字が継続するのではなく、国家や王、皇帝、天皇など、その治世の都合によって変更することのできる暦のことです。各元号の元年は常に1年目を意味します。その元号を使うということは、そのままその元号を示した王や皇帝、またはその国に従うことを意味し、「同じ元号で同じ時を過ごす」というような意味になるのです。中国がもっとも古くから元号を使ったとされています。そのために、朝鮮半島の国家は中国の元号を多く使っているようで、独自の元号になるのはかなり後の歴史になってからになります。地理的に離れていたり、あるいは中国の都から離れていた日本やベトナムは早くから独自の年号を使い、中国とは一線を画していたというような歴史になるのです。このほかにも、独自の年号を使ったことが明らかな東アジアの国家は然、高昌、南詔、大理、渤海等が挙げられます。中国では、前漢の武帝の治世・紀元前115年頃に、統治の初年に遡って「建元」という元号が創始されています。以後、清の時代まで皇帝の存在に合わせて元号が用いられました。

日本の場合は、卑弥呼の時代などは、中国の暦を使っていたか、もしくは独自の暦を使っていたが、その記録がないのでよくわからない、という事が本音のところ。飛鳥時代などになると、「天皇の治世の何年目」というような書き方になり、その書き方に干支を組み合わせることでわかるような仕組みになっていました。ですから、俗に「大化の改新」といわれる天皇親政の切っ掛けとなった、中大兄皇子と中臣鎌足による蘇我蝦夷・蘇我入鹿親子の殺害事件は、干支にちなんで「皇極四年乙巳の変」という言い方をします。当時の中国暦などを使っていなかった事が明らかになりますね。

その大化の改新による天皇親政の改革によって、「大化」という元号を使うようになりま
す。その後文武天皇 5 年、西暦 701 年に「大宝」と建元し、以降継続的に元号が用いられ
ることとなった日本は、その後も元号を使い、現在も「平成」という元号を使っています。
中国と違って、その伝統を守っているといえるのでしょうか。

明治になって「一世一元」となって、天皇が治世の都合によって随意に元号を変えるこ
とができなくなりました。そのために明治以降の元号は、天皇一代に元号一つというよう
になっています。

では、なぜ天皇や中国の皇帝は、治世の都合やその在位によって元号を変えることが
できたのでしょうか。また中国でそうですがその元号を使うことによって、どうして中国に
支配されたことになるのでしょうか。

もともと農耕民族である日本人や漢民族は、農耕に関する神が最も重要な神と考
えていました。そのために、太陽の神や土の神、そして稲の神を最も重要な神として奉
っていたのです。そして、その神の子孫または神から人間界の支配を任された人が天
皇や皇帝であるというような感覚になっていました。このことは、西洋も全く同じで、
古代ギリシアのポリス国家では、王はそのまま神の子孫と思われていたのです。その
ことが中世になって、しっかりとした思想になってきます。それが「王権神授説」にな
って来るのです。

逆に言えば、神の意思に従っているから「新しい時代」を作ることができるというこ
とになります。天皇の御代が変わるということは、そのまま新しい時代になるというこ
を意味していますので、新しい時代にふさわしい元号に代わりますし、また、何か悪
いことがあれば、その悪いことを昔のこととして葬り去って、新しい時代を迎えるこ
とによって、厄を取り除くということを考えていたのです。

その「時代」を共有するのは、同じ神の意思に従っているということの意味します。
そのために、同じ元号を使うということは、その神が「人間界を支配する」というこ
を認めた皇帝や天皇に従うということの意味するのです。そのために、元号を使うこ
とは、その国の支配に服したということの意味します。また、神の意志に従っているこ
とで、元号を天皇や皇帝は、随意に、というよりは神の意志に従って変えることが
でき、そのために新しい時代を作り出すことができるとされてきました。

日本では天皇は「現人神」として、神として扱われています。そして、日本の中
では、天皇は、時代や暦を司る神として存在するとされているのです。天上界の神々
に、「暦と時代を作ってよい」とされた存在が天皇であるということになりますね。

3 年号を通して使われる干支

しかし、元号が次々と変わってしまうと、西暦のように続き番号ではなくなっ
てしまうので、年代の継続性や、年代の前後がわからなくなってしまう
でしょう。それはどのようにしていたのでしょうか。

その時に使われたのが干支です。干支は十二支と十干の組み合わせでできた 60 を周期とする数列です。すでにこの連載では 1 度ご説明していますが、簡単に復習してみましよう。十干は甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸の 10 種類からなり、十二支は子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥の 12 種類からできており、それぞれに意味があります。十干に関しては、陰陽五行説からきています。これは万物が「木・火・土・金・水」の 5 つの要素からなるとされており、その 5 つの要素総てに「陰・陽」があるとされています。そのために 10 種類の数列ができるのです。これに対して十二支は、古代中国の天文学であった「十二辰」の考え方が起源といわれています。これは自分の位置から天球を東から西に十二分割し、その 12 の方角すべてに性格を付けたということからできています。

十二支の一つ一つに動物が書かれているのは、そのような歴史から出てきているものなんです。

もともとがこのような「天球の分割法」からきていることから、十二支は「方角」を表す道具として使われました。しかし、天球の古い使われ方は、何も「方角」ばかりではありません。そうです、「太陰暦」が「月の満ち欠け」で季節や暦を作ったように、月の位置や月の満ち欠けが「天球の十に分割したどの位置で起きたか」ということで、季節、要するに暦を知ることができました。同じように、太陽の位置が天球のどこにあるか、太陽がどの場所から昇った、ということで「時・分・秒」などの時間を知ることでもできたのです。

このようなことから、十二支は「方角」を知る道具であり、同時に「暦」と「時間」を表す道具にもなったのです。

さて、この十二支の動物の割り当てに関しては、今でも研究が進んでいますがあきらかになっていません。中国の「漢書」によれば、漢字の音から、草木の成長における各相を象徴したものとされる説がありますが、実際にその内容がどのように関係しているのかはよくわかっていません。

また、日本においては「十二支」に動物が割り当てられていますが、その動物の意味もあまり良くわかっていません。一説には、人々が暦を覚えやすくするために、身近な動物を割り当てたという説や、バビロニア天文学の十二宮が後から伝播してきて十二支と結びついたという説がありますが、いずれも、よくわかってはいません。いずれにせよ、動物が割り当てられたことが後漢書に書かれているので、少なくとも後漢の時代よりも相当古い時代に、動物が割り当てられたこととなります。

牛・馬・羊・鶏（酉）・犬・豚（猪）は六畜と呼ばれる古代中国における代表的な家畜です。一方、鼠・牛・虎・兎・龍・馬・羊・犬・豚は漢字において意符となり、部首となっている漢字です。双方に入っているのは「牛」「馬」「羊」「犬」「豚」の 5 つの干支になります。一方この中に一つも入っていないのが「蛇」「猿」です。このようなことから、中国で様々に解釈されるようになったのです。

4 日本の歴史に出てこない「羊」

さて、この十二支十干は、そのままの形で日本に伝わってきます。しかし、それは新しい時代のものが入ってきているのですね。

この十二支に関しては、占いの道具としてすでに秦の時代には使われていました。当時の占いに関する書、といっても竹に書かれたものですが、その「日書」には、

「子、鼠也。…丑、牛也。…寅、虎也。…卯、兔也。…辰、(原文脱落)。…巳、蟲也。…午、鹿也。…未、馬也。…申、環也。…酉、水也。…戌、老羊也。…亥、豕也」

(訳：子とは鼠(ねずみ)である。…丑とは牛である。…寅は虎である。…卯は兎である。…辰は(原文脱落)。…巳は蟲(むし、へびか?)である。…午は鹿である。…未は馬である。…申は環である。…酉は水である。…戌とは老いた羊である。…亥は豕(ぶた)である。)

とあります。要するに、鹿が入っていて犬がいませんし、また羊も字が違い、それも「老いた羊」になっているのです。

しかし、日本には「未=羊」で入ってきています。これは、日本に秦の時代ではなくそれ以降に十二支が伝わったということを意味します。

しかし当時「羊」は日本にはいません。文献に現れる記録では、599年に、推古天皇に対し百済からの朝貢物として駱駝、驢馬各1頭、白雉1羽、そして羊2頭が、嵯峨天皇の治世の弘仁11年(820年)には新羅からの朝貢物として鷲鳥2羽、山羊1頭、そして黒羊2頭、白羊4頭、との記録があります、また、醍醐天皇の治世の延喜3年(903年)には唐人が”羊、鷲鳥を献ず”とあり、他の記録も含め何度か日本に羊が上陸した記録はありますが、その後飼育されたり、あるいは、日本で羊が利用されたというような記録はありません。

しかし、天武天皇の時代に関東地方で「羊大夫」といわれる人物がいたという記録があります。これは上野国多胡郡の郡司といわれています。これは武蔵国秩父郡、現在の埼玉県本所市のあたりで、和銅を発見し、その功績から上野国多胡郡の郡司と藤原姓を賜り郡司になったといわれています。その和銅によって「和同開珎」が造られ、その利益によって武蔵国と上野国は、大いに栄えたといえます。羊大夫は、都から多くの渡来人を招聘し、焼き物、養蚕など新しい技術を導入、また蝦夷などと交易するなど、地域を大いに発展させました。当然に、中央の藤原不比等も、銅をたくさん採掘するために、渡来人が遣わされたとも考えられています。しかし、その渡来人の高麗若光の讒言により朝廷から疑いをかけられ、討伐されてしまいます。

この高麗若光は、霊龜2年(716年)武蔵国に高麗郡が設置された際、朝廷は東海道七ヶ国から1799人の高句麗人を高麗郡に移住させている中の一人です。高句麗が滅ぼされたことによって帰国する国がなくなった彼らに、高麗郡を与え、そこで生活できるようにしたのです。その高麗若光(こまのじゃっこう)が、現在の埼玉県の高麗神社の御祭神になっています。

さて、このように「羊」は、人の名前などで出てきます。では羊は古代の人々にどのように考えられていたのでしょうか。

実は、「羊」が書かれた文献も日本にはほとんどありません。実際に存在するのは和歌が2首あるだけです。

一つ目は新勅撰和歌集の中に源有房が「題志らず」として
ほどもなく ひま行駒を みても猶 あはれ羊の あゆみをそおもふ

という歌です。この歌にあるように、羊は、「歩みが遅くゆっくりとした生き物」というような内容の代表の生き物になっています。

もう一つは新撰六帖題和歌に「けふり」という題で歌われた右大弁入道光俊の歌です。

もえつゝく 香のけふりの 時うつり ひつしのあゆみ 今日も程なし

今度は、おなじく「ゆっくり歩く」とはいえ「確実に前に進む」というような意味で「羊の歩み」という意味で使われています。

源有房は平安時代後期の貴族です。ちょうど源平の合戦をした頃と想像していただいたらよいのではないのでしょうか。時代の次々と移り変わる状態から、羊のようなゆっくりとしたペースを望んだ歌なのかもしれません。一方右大弁入道光俊は、本名は葉室光俊。父光親を承久の乱の敗北によって死罪となって亡くし、その後三十六歌仙の1人に数えられる歌人となる鎌倉時代中期の人です。平安時代後期から鎌倉時代にならないと「羊」を詠んだ歌が出てきません。推古天皇の時代に羊が日本に渡来したといっても、和歌を詠む人々の目に触れたり、あるいは、その内容を歌に詠めるほど印象に残ったり、あるいは生活の中に溶け込むことはなかったということではないのでしょうか。

逆に言うと羊の和歌を詠むにあたって、羊のイメージというのは、羊そのものの見た目と、渡来人などによって聞かされた内容でしかないということになります。そして「羊」に関して詠まれた内容はあまり、良いイメージではなかったのかもしれません。これは、この歌が詠まれたときに影響を与えた渡来人は、平清盛による日宋貿易が中心です。宋は、中国でも南の方で栄えた国ですので、北方、特に騎馬民族の金という国家とは対立していました。金は騎馬民族で、羊を主たる家畜として飼っていましたから、宋の人々にとっては「羊は敵に富を与える動物」というようなイメージがあったのかもしれません。そのために、あまり良い印象で日本に伝わらなかったのではないかと、そのように考えられているのです。

5 日本人の羊の飼育の歴史と庶民が「未年」を占えた理由

ここまで「全く羊がいなかった」ということばかり話しています。実際に、京都の貴族

も羊について知らず、和歌が 2 首ある程度です。しかし、時代が進むと、徐々に羊に関しても知られるようになってきました。よく「羊は明治になって入ってきた」といわれていますが、そうではありません。

明和 2 年、1770 年、平賀源内は長崎に行った時に、オランダ人から羊を購入し、郷里の知人に送って飼育を依頼しています。「羊四頭無事の由、わらを多食候も臟腑を巻き死候間、わらを食わせぬように可被成候」という手紙も残っており、実際に羊が飼われていたことが良くわかります。平賀源内は、故郷の志度で羊毛を紡ぎ、毛織物の研究をしています。この毛織物を「国倫織（くにともおり）」と名付けています。なお「国倫」とは、平賀源内の号ですから、ヨーロッパなどで通常に行われていた毛織物に関して、平賀源内は日本にないことをいいことに、自分の名前を付けていたのです。

その翌年、田沼意次が老中に就任し、緬羊の飼育を試みました。彼の失脚後も幕府は緬羊飼育事業を継続しました。幕府による羊の飼育は巢鴨の薬園に移り、最大 350 頭規模にまで拡大、民間でも緬羊飼育を奨励しました。天保 5 年、1834 年には勘定奉行の名で「緬羊がほしければ百姓でも下げ渡すので、巢鴨緬羊小屋に来られたし」との達しが出されています。

羊の飼育をしていたのは平賀源内や幕府ばかりではありません。薩摩藩は熱心に羊の飼育を行っていました。韓国の鬱陵島から羊を輸入し、毛織物と食用の二方面で飼育をしていたとされているんです。

しかし、このように広まっても、なかなか庶民の目に触れることはありません。

では、「未年」の性格などはどのようにして知ったのでしょうか。

実は、干支には「向かい干支」という考え方があります。要するに、干支を円状に並べたときに、その中心の反対側、要するに向かい側の干支の人と性格がぴったりと合う、とされていたのです。

向かい干支は自分の干支と正反対の性質を持っているため、自分にはないパワーを与えてくれる「守り干支」と呼ばれ、大事にするものと考えられていたのです。向かい干支を大切にすると幸福が訪れると言われ、子供の七五三の着物に向かい干支の刺繍をあしらひ、幸せを願うという風習もあったそうです。逆に言えば、「羊」そのものを知らなくても、干支の方がわかっていれば、「未年」の性格はよくわかるということになります。

未年の「向かい干支」は丑年です。ここで性格を言うことはしませんが、牛ならば、日本人は古来から親しんでいる動物です。その「牛」と相性の良い、それでいて「牛」と反対の性格というのが羊の性格、昔の人はそのように考えていたのではないのでしょうか。

日本の庶民は、そのように、「知恵」で自分なりに解釈し、そして完全に庶民のものとして、干支も羊も上手に自分の生活に取り込んでいたのです。日本人が最も優れていたのは、そのような「あるものを使う」という知恵だったのかもしれない。そして、想像の動物以上に縁が遠い「未年」、どのようなことが起こるのでしょうか。

今年一年もよろしくお祈りします。

この連載が本になりました。

『日本文化の歳時記』(振学出版) 1,200 円 (税別)。全国の本屋で絶賛発売中です。ぜひ、日本文化を知るための一助として、お手元においてお役立てください。